

大学コンソーシアム京都主催
「2007年度第13回 FD フォーラム
—大学教育と社会」に参加して

畑 公 也

2008年3月8日、9日両日、立命館大学衣笠キャンパスにおいて開催された、大学コンソーシアム京都「2007年度第13回 FD フォーラム」に参加、発表しましたので報告いたします。神戸薬科大学は大学コンソーシアム京都の加盟校ではありませんので、部外者たる私が当フォーラムに参加することになった経緯からまず説明しますと、以前から京都薬科大学の秋澤雅男先生とは、同じ薬科大学のドイツ語教師という立場上、語学教育に関して意見交換、情報交換を行っていましたが、この度同氏がフォーラムの第6分科会「教養教育と第二（初修）外国語教育」のコーディネーターを務められることになり、発表者のひとりとして私を指名され、それをお受けする次第となりました。

大学コンソーシアム京都がすでに13年前から、フォーラムを開催して、FDの問題に取り組んでこられていたことを、寡聞にして知らなかったものですから、まずその先見性に驚かされました。この度実際に参加して、その規模の大きさ、運営の用意周到さを目の当たりにして、あらためてコンソーシアムのこの問題に対する真摯な姿勢に感銘を受けました。また、加えて2009年のFD義務化を控えて、北海道から沖縄にいたる300以上の大学から、当フォーラムにとっても初めてとなる千人を越える参加者が集まることになり、会場を包むそ

*2009年1月13日受理。

の熱気に圧倒されるとともに、この問題への関心の高まりを実感する次第となりました。

1) 全体シンポジウム（1日目）について

フォーラムは二日に分かれて行われ、1日目にはフォーラムのテーマ「大学教育と社会—FD 義務化を控えて」をそのまま掲げた全体シンポジウムが開催され、2日目は九つの分科会と三つのミニシンポジウムが並行して開かれました。

1日目の全体シンポジウムの前には、東京大学名誉教授、大学教育学会会長の寺崎昌男氏による基調講演が予定されていましたが、残念ながら氏の急病のため中止となり、かわってシンポジウムの時間を拡張し、そのぶん十分な時間をもって討議が行われ、充実したシンポジウムとなりました。

そこではまずコーディネーターの京都産業大学教育エクセレンス支援センター副センター長、河原地英武氏から、FD は個々の大学の個々の教員の問題に閉じ込められるものではなく、今大学が社会から何を求められているのか、大学は社会に何を発信できるか、大学界全体が問われている問題である、との指摘がなされました。

第1発表者の立命館大学教学担当理事、中村 正氏は、大学教育は学生に「〇〇を教える」というのではなく、「学生が〇〇できるようにする」という学生主体の教育、「学習者が中心となる教育」であるべきだ、と主張するとともに、初年次の第1セメスターで学生を主体的な学びの姿勢に導くことの重要性を説かれました。

続いて第2発表者、大阪市立大学大学教育センター専任研究員の飯吉弘子氏は、産業界が学生に求める力として、問題発見・解決力、論理的思考力、クリティカルシンキング、キャリア・デザイン力、及び自律的に学び続ける力と自

己を相対化する力を挙げ、それらをあわせて「自発的知的拡張性」と表現されました。それらを獲得させるためのFDとは、授業法や教育内容の改善といった範疇に止まらず、大学とはどういう場で、大学教員とはどういう力を持ち、どういう教育や職務を担うべきなのか、あらためて再確認するところから始めなければならない、との論を展開されました。

最後の発表者、河合塾教育研究開発本部教育研究部長、滝 紀子氏は、受験生や高校の先生の視点から、大学を選ぶために教育内容を知らうとしても、わかりやすい具体的な情報が入りにくいことを指摘、例えばカリキュラムツリーやカリキュラムマップを整備して、大学で何をどのように学ぶことができるかを明示することの必要を述べられました。またこれからのFDは、育てたい学生像を明確にし、教育目標をきちんと設定し、それに基づいてカリキュラムを編成し、プログラムの開発が行われ、教員がその趣旨を十分に理解したうえで授業を展開することをめざすべきであり、それによって学生の満足度は必然的に高まるはずである、と締めくくられました。

これらの意見に対して、二つの会場に割り振られた千人を越える参加者から様々な質問や意見が出され、中には三者の意見が理想論に傾いており、それぞれが異なった環境におかれている教育の現場では問題はより錯綜しており、理想論では対処しがたいとするような意見もあり、議論が白熱しましたが、その経緯はここでは割愛させていただきます。

2) 分科会について

私の参加しました第6分科会のねらいは「教養教育と第二（初修）外国語教育」というテーマの下で、大学における教養教育と第二外国語との相互関連性、またはその一体二重性（第二外国語は多くの場合、教育科目の区分上、教養科目に入れられる）について議論を深めるとともに、大学教育全体のなかでそれ

らが専門教育といかに相互補完し、連携していくべきかを考えよう、というものでした。発表者は、大阪市立大学の福島祥行氏（テーマ「外国語教育の目標を考える―非英語・高等教育・生涯教育」）と立命館大学の松尾 剛氏（テーマ「初修外国語を学ぶ意義をいかに説くか」）と私でした。ここには私の発表要旨のみ記しておきます。

私の発表テーマは「薬科大学における初修外国語教育と教養教育」としました。薬科大学は2006年に4年制から6年制への移行という大きな制度変更を経験しましたが、そのなかで私たちはいかにして教養教育と専門教育との新たな関係を築いていくかという問題に直面しています。それは確かに特殊な環境における問題ではあるものの、そのなかに必ずや一般的、普遍的な問題に通ずるものがあるはずである、と考えたわけです。まず神戸薬科大学における以下のような初修外国語教育の推移について説明しました。

①1993年以前

「ドイツ語」必修8単位

1年次2コマ（4単位）

2年次1コマ（2単位）

3年次1コマ（2単位）

「化学ドイツ語」3年次必修2単位

「ドイツ語文献講読」4年次選択



②1994年 女子大から男女共学に カリキュラム改定

「ドイツ語」必修6単位

1年次2コマ（4単位）

2年次1コマ（2単位）

「総合文化演習」選択必修2単位



③1999年 カリキュラム改定

「ドイツ語」必修4単位

1年次1コマ（2単位）

2年次1コマ（2単位）

「総合文化演習」選択必修2単位



④2006年 薬学6年制開始、新カリキュラム

「ドイツ語」、「韓国語」、「中国語」選択（最大2単位）

1または2年次（前期・後期各1単位）

「教養リテラシー」

1年次1コマ（半期1単位）

「総合文化演習」選択必修計4単位

2年次1コマ

3年次1コマ

1991年の「大学設置基準の大綱化」以降、全国の大学で初修外国語の必修単位削減が行われてきましたが、薬科大学の場合、そこに専門科目カリキュラムの過密化という事情が加わります。それが4年制から6年制への移行を促したわけですが、薬剤師国家試験の合格率という目にはっきりと見えるかたちで足枷を嵌められた薬科大学では、その矛先は真っ先に英語以外の外国語に向けられます。（英語の重要性は決して否定されることがなく、6年制の「薬学コア・カリキュラム」においてもそれを重視すべきことが強く主張されています。）

神戸薬科大学においても、女子大からの共学化や国家試験合格率の低迷などをきっかけとしたカリキュラム改定の度ごとにドイツ語の必修単位は減らされていき、6年制の新カリキュラムではついに選択科目になりました。このよう

なマイナスの流れのなかで、私たち教養教員はその削減が教養教育全体として一方的な「後退」とならないようにするために、1995年「総合文化演習」というゼミ形式の授業を導入し、カリキュラム改定の度に、ドイツ語とは逆にその内容を充実させるよう努力してきました。2006年の改定では、ドイツ語に関して決定的な後退を甘受するのと引き換えに、それまで2年次にのみ置かれていた総合文化演習を3年次にも置いて、2年間の受講を義務付けるとともに、1年次にはそのプレ・トレーニングを行う「教養リテラシー」という科目を設置しました。

これら演習系科目では、日本語能力の涵養、プレゼンテーション能力、コミュニケーション力の強化はもちろんのこと、それ以前に何よりも自分で問題を発見し、解決するための「考える力」を育成することを目指しています。今回のフォーラムでも、シンポジウム等においてしばしば、大学教育の最も重要な課題は、入学から卒業までの過程のなかで学生に「考える力」を身につけさせることであり、そのような能力を備えた学生を世に送り出すことによって、大学は社会に貢献し、その使命を果たすことができるのだ、という主張がなされました。

薬科大学においては、医療の現場で自分の頭で考えて医師や看護師に対しても対等に発言できる薬剤師の養成という課題が課せられるになります。この点においては専門教育も教養教育も区別がありません。神戸薬科大学の新カリキュラムでは、これらの演習科目とスモールグループ・ディスカッションを基礎にしているという点で共通する科目として、専門導入科目のひとつである「早期体験学習」（1年次必修：実習体験をグループで発表し、レポートを作成するという課題が組み込まれている）や5年次に置かれた専門科目「処方箋解析」（スモールグループで処方箋をめぐる問題発見、調査、分析の演習を行う）があります。言葉を変えると、これらの科目において専門教育と教養教育は有機的に関連付けられている、もしくは連携していると言うことができるのではな

いでしょうか。

私自身について述べるとすると、このようなカリキュラム改定に即応して、教育の軸足をドイツ語教育から演習系科目へとシフトしていったわけですが、ドイツ語教育の縮小を容認したという意味でドイツ語教師としては一種の「敗北」を喫したと見なされても仕方ありません。それについて、多くが初修外国語の教員で占められていた分科会のフロアから厳しい意見もでるのではないかと覚悟していたのですが、意外にもそのような声は聞かれず、むしろ「そういう道もありうるであろう」と一定の理解を示す雰囲気によって受け入れられたことに安堵するとともに、今後さらに試行錯誤を続けていくための勇気を少しばかり与えられたような気がいたしました。

三者の発表は午前中で終え、午後から2時間かけて質疑応答が行われ、フロアからも活発な質問や意見も出て、有意義な討議となりましたが、紙面の都合上ここでは割愛いたします。